

# Institutional Research としての学生調査ノウハウ構築に向けて(1)

—— P 短期大学学生調査から ——

大佐古 紀 雄

## Construction of a Knowhow of Student Research as Institutional Research (1)

—— Student Research in P College ——

Norio Osako

### Abstract

Student researches in higher educational institution by oneself put in one's or multiple teachers' own right. To use these researches for institutional researches to be expected in U.S., I put in student research in P college to begin construction of a knowhow of student research. In some analysis of this research, issues for student researches in higher educational institution by oneself come up. I made myself clear about these issues and pointed out problems.

Keywords : Student research, Institutional research, Research on higher education, Research on university or college

キーワード : 学生研究, institutional research, 高等教育研究, 大学研究

### 序 本論の背景・目的・方法

日本の大学(本稿では短大も含めて大学とする)は、過酷な競争にさらされており、とくに大学経営の根幹に直結する学生獲得競争は激化の一途をたどっている。最大の要因は、18歳人口の長期的逡減による大学教育の量的需要減少およびその中の大学設置抑制路線の転換によるとあってよい。すでに廃校となる事例がめずらしくなく、大学のもつ属性(歴史、ブランド、偏差値など)に関係なく、より一層の経営努力が求められるようになっている。

日本では収入の多くを授業料に頼ることが大学経営の一般的な傾向となっているため、当然の帰結として生き残りのためにもっとも注力されるの

が学生の獲得となる。しかし、だからといって入口段階での募集だけに力点を置いて「入れてしまえばこっちのもの」で終わらせるわけではなく、在学段階での学生への教育・生活支援、そして出口段階での就職支援(大学によっては卒業後フォローまで行うこともある)に至るまで、一貫して学生を総合的にサポートする体制づくりを心がける大学が目立っている。いわゆる「学生消費者主義」(Riesman: 1980)の一端がここにもあらわれているとあってよい。

大学が学生を《消費者》ととらえて扱うことを全面的に是とするわけではないが、企業経営に準えて考えるならば、このような学生サポートにおいても、《消費者》たる学生のニーズや性向を把握したうえでの体制構築が必要となってくる。個別

の大学レベルでも、内部的に「満足度調査」などの形で把握のためのチャンネルを用意しているところも少なくないであろう。

しかし、こうした学生のニーズや性向を把握するために個別の大学がとる手法について、一定の信頼できるノウハウが確立されているわけではない。おそらく、大学個別の「創意工夫」で実施されているのが実情であると思われるが、一歩進めてこうしたノウハウ構築を進めていくことも、大学研究の課題の一つであると考えられる。

本稿では、こうした大学生を対象とした研究にどのようなものがあるかを概観し、つづいてP短期大学（以下P短大）において実施したアンケート調査の結果分析を行うが、P短大の学生の傾向分析自体を直接の目的とするものではない。むしろその分析の過程から、個別の大学が自大学のために行う学生研究のあり方をめぐる論点を浮かび上がらせ、そこから今後さらに検討を深めるための一助となる知見を得たい。

## 1. 学生研究の現状

国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館ホームページの「教育研究論文検索」で、「大学生」を論題に含み、2000年以降に発表された論文を検索すると609件がヒットした(2006年10月13日現在)。詳細な数的集計はここでは行わないが、これらを手がかりに、「大学生」を対象とする研究の全体像をおおまかに俯瞰してみる。

まず、自校の学生を対象にした研究が目立っている。大学における学習に関わるテーマ(学習観、学習法、学習スキル、授業のあり方など)、大学生の心身・健康に関わるテーマ(食生活、体力測定、心理傾向分析など)、大学生の社会一般に対する意識に関わるテーマ(職業観、ライフスタイルなど)などがあり、研究テーマは多岐にわたる。さらに、各大学の紀要に掲載される論文や報告が多く、半分超の323件あった。これらの状況から、学生研究の多くが、個々の大学の実情に根ざして、個人ま

たは問題意識を共有する複数の教員によって行われていることが示唆されるだろう。

一方、個別大学の学生を対象を限定することなく、大学生一般(あるいはある属性をもつ大学生一般)を対象とした研究ももちろんみられる。これらには、雑誌論文だけではなく、まとまった書物として出版されているものもある。いくつか例を挙げると、心理学の立場から研究を進めている溝上慎一は、『大学生の自己と生き方』(溝上：2001)や『大学生論』(溝上：2002)などの成果を明らかにしている。とくに、前者の研究成果を歴史的に位置づけるため、後者の第1章では戦後の大学生論の系譜を整理している。また、学生文化の視点に立った大学改革や学生支援が必要との問題意識から、大学生のあり様を研究している武内清は、『キャンパスライフの今』(武内：2003)や、いくつかの科研費研究による成果を提示している。またこれらのほか、学生研究に直接位置づけることはできないが、戦前には「大学及大学生」という雑誌が1917年から約1年半刊行されているなど、「学生気質」に対する一定の関心は、日本では古くからあったことも提示しておきたい。

## 2. IR (Institutional Research)

米国では、ほとんどの大学に自校の諸状況を調査研究するためのIR (Institutional Research)を行う部門が置かれている。その設置理由の一つには、アクレディテーション (accreditation)<sup>(註1)</sup>を受けるための準備機能がある。これに向けて、大学の状況を自己研究した上で報告書を作成する必要がある。また、収集したデータを活用して、自大学の運営のために必要な中長期的な計画を策定する機能も担うようにもなった(青山：2006：p. 114)。

日本では、このようなIR部門を設けている大学は数少ないと思われる。これでは、教員が問題意識に背中を押されて行う自校学生の研究が私的な研究のまま埋もれてしまう危険も大きい。これら

が改善に生かされるように、より分析手法を効果的なものに洗練したい、本稿の目的の根底には、そうした問題意識もある。

### 3. P短期大学での学生調査

#### 1) P短期大学および学生調査の概要

P短期大学は、関東北部に位置する2年制の短期大学である。1970年に開校した保育者養成を業とする専門学校が前身で、1977年に発展的解消によってP短期大学が発足した。現在、保育学科と英語科を前身とする現代コミュニケーション学科（以下現コミ学科）の2学科で構成されている。保育学科は、保育士資格・幼稚園教諭2種免許の両方が取得できる。現コミ学科は、「心理」「児童英語・英会話」「観光」の3コース制をとっている（P短期大学『学生必携』より）。

本調査は、「現代の大学生の生活と意識に関する調査」と題して実施した。以下に調査概要を示す。

〈調査対象〉

P短大全学生（除休学者）617名

保育学科486名（1年242名／2年244名）

現コミ学科131名（1年77名／2年54名）

〈調査時期〉2006年7月

〈調査方法〉授業時に学生が記入（自記形式）。

※一部で持ち帰り法を使用。

〈回答数（カッコ内は回答率）〉523名（83.8%）

保育学科：412名（83.6%）

1年：234名（96.7%）

2年：174名（69.3%）学年不明：4名

現コミ学科：110名84.0%）

1年：66名（85.7%）

2年：42名（77.8%）学年不明：2名

学科不明：1名

予備調査：保育学科2年12名の学生に実施。事後、調査票を最終修正。

なお、調査票の作成に関しては、次に触れる「21大学調査」で使用された調査票の一部の設問をピッ

クアップし、適宜P短大の実情にあわせて修正した上で、筆者独自の設問を加えて作成した。

#### 2) 21大学調査について

本調査で使用した調査票のもとになった「21大学調査」とは、武内（2005）において報告されている「21大学・学生調査」のことである。

この調査は、2003年11月から翌年1月（2003年調査）および2004年11月から翌年1月（2004年調査）にかけて実施された。国立5校、私立16校の合計21大学（すべて4年制：うち女子大学が3校）の文系学部に所属する学生を対象にしているが、2つの調査時期両方に実施したのは2大学のみで、あとは10大学が2003年調査、9大学が2004年調査にて実施している。分析はこれら2大学については2003年調査を使用して、2003年調査と2004年調査のデータを結合して行っている。標本数は2721名である。

21大学調査の特徴の一つに、独自の大学類型を設けて分析をはかっていることがあげられる。「大学設立年」「入学偏差値」「学生数」「大学種別」の4つを用いて、21大学を「伝統総合大学」「中堅大学」「新興大学I」「新興大学II」の4グループに類型化している。これは表1のようになる。

表1 21大学調査での大学類型基準

	設立年	偏差値	学生数
伝統総合	1949以前	55-66	7000以上
中 堅	1949-59	48-56	5000-12000
新 興 I	1960-89	42-50	5000未満
新 興 II	1990以降	41-45	5000未満

※また、「伝統総合」には総合大学のみが入り、「中堅」「新興I」には総合大学・単科大学が混ざっており、「新興II」には単科大学のみが入っている。それぞれ、「伝統総合」は4校、「中堅」は8校、「新興I」は5校、「新興II」は4校である。

#### 3) 調査票の意図と構成

先述の通り、本調査は「21大学調査」をベース

に実施した。大きな理由としてはつぎのことが挙げられる。「21大学調査」の調査目的について、武内は「学生にとって良かれと考え実施した学生支援であっても、学生の行動傾向やキャンパスライフ（生活実態）と合わない支援は、有効に機能しない」、「学生を大学コミュニティの一成員と考え、その学生の勉学やサークル活動、友人関係、職業選択に有効に機能する学生支援策を探る必要がある」（21大学調査報告書：p.1）と述べているが、これは筆者の見解と大きく共通し、かつ問題意識にも通底しているからである。また、設問が広範囲にカバーされているため、必要な部分をそのまま参考にしやすいということもある。

表2 調査票設問内容一覧

設問番号	内 容
Q 1～Q 4 ☆	基本属性（学科・専攻・コース・学年・入試形態・出身校）
Q 5～Q 6	P短大や所属学科が第1志望だったかどうか
Q 7	P短大への入学理由
Q 8	P短大の授業に対する感じ方
Q 9 ★	導入教育・初年次教育として実施を要望するもの
Q 10★	大学に対する入学前のイメージと入学後に感じたギャップ
Q 11・14☆	悩みごとの相談相手(学習・進路/人間関係)
Q 12☆	高校時代の活動
Q 13	大学での価値観変化
Q 15	友人関係
Q 16☆	大学での人間関係・雰囲気への満足度
Q 17☆	サークル・クラブ・同好会
Q 18	性格の自己分析
Q 19★	自分の将来への希望がもてるかどうか
Q 20☆	学生生活における諸活動の比重
Q 21☆	大学・勉学に対する考え方
Q 22 (自由記述)	大学教育全般およびP短大に対して感じる事、希望すること

調査票は、表2の22の設問から成り立っている。

断りのないものはすべて択一式である。なお、★印は筆者独自の設問、☆印は「21大学調査」から修正を入れた設問である。

これらの調査によって、得られると思われる要素は、次のように整理できる。

1. 学生の属性と意識(Q 1～4、Q12、Q13、Q15、Q18、Q19、Q20、Q21)
2. 入学に際して (Q 5、Q 6、Q 7)
3. P短大が提供する教育に対する意識 (Q 8、Q 9)
4. P短大が提供する学生支援に対する意識 (Q11・14・16・17)
5. 学生の大学に対する思い (Q10、Q22)

なお、本稿では紙幅の関係上、学生像および大学での学習に対する意識の傾向を探ることに目的を絞り、一部の設問の分析に限定する。

#### 4) 学生の自己分析に関する学科間の相違と21大学調査における4類型との比較

Q18に配置した10点の小問について、両学科の間で有意な差があるかどうかを確かめた。なお、回答の「とてもそう」「ややそう」の2つを合計し検定を行った。

まず、P短大全体と21大学調査の4類型（以下4類型）とで、有意な差( $\chi^2$ 検定)があったものについては、以下の表3～12の\*\*印(1%水準)または\*印(5%水準)にて示している。なお、21大学調査において4類型間に有意な差がみられなかった(5%水準)、Q18-4、5、7の設問については、参考までに4類型の数値だけを示し、検定は行っていない。

また、Q18-1(初対面の人と会うと緊張する)およびQ18-8(自分の将来に不安を感じる)を除いては、両学科間に有意な差はみられなかった( $\chi^2$ 検定:5%水準)。したがって、上記2問についてのみ、学科ごとに21大学調査の4類型との間で優

位な差があるかどうかをも確かめた。

なお、P短大は、厳密に条件を当てはめると4類型の中の特定の類型に収められないが、もっとも条件的に近いのが「新興大学I」であることを補足しておきたい。

表3をみると、とくに保育学科は、どの類型にも比して初対面の人に緊張しやすい傾向にあることがわかる。主とする相手は乳幼児とはいえ、保護者や地域の子育て支援にもかかわりが求められるため、人と接する場面が多くなるのが保育者である。そういう類の職業を目指す立場にあって、これは意外であった。

表3 1. 初対面の人と会うと緊張する

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	34.1	47.9	14.8	3.2
現 コ ミ	28.8	44.2	19.8	7.2
全 体	33.0	47.1	15.9	4.0
伝 総**	25.5	42.0	24.2	8.3
中 堅**	29.6	43.1	20.9	6.4
新興 I *	32.6	43.2	18.3	5.9
新興 II **	30.9	41.0	20.7	7.4

※保育は全4類型と有意差があった(1%水準)

※現コミは全4類型と有意な差はなかった。

表4 2. 何事も自分で決めないと気が済まない

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	5.1	28.0	60.3	6.6
現 コ ミ	9.9	27.9	59.5	2.7
全 体	6.1	28.0	60.1	5.8
伝 総**	12.7	38.0	42.8	6.4
中 堅**	10.3	35.3	48.9	5.4
新興 I *	10.9	28.3	55.0	5.9
新興 II **	9.3	33.6	49.7	7.4

表4では、どの類型とも有意差があった。P短大の学生は、全体的に自己決定をあまりしたがらず、他者に依存する傾向が強いといえそうである。

表5でも、どの類型とも有意差があった。P短

大の学生は、孤独を好まず、「人好き」で「さびしがりや」の傾向が比較的強いと思われる。

表6では、有意な差はないものの、比較的不規則生活を許容する傾向が多少強めな傾向がみとれる。不規則な生活をしている学生の学業に、実際に支障が及んでいないかどうかを確かめる必要がある。

表5 3. 人と一緒より1人でいる方が好きだ

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	2.4	25.1	55.1	17.3
現 コ ミ	3.7	33.0	48.6	14.7
全 体	2.7	26.8	53.8	16.7
伝 総**	10.1	42.6	38.5	8.7
中 堅**	10.8	38.0	40.9	10.3
新興 I **	10.9	37.9	38.2	13.0
新興 II **	8.3	34.7	43.4	13.6

表6 4. 不規則な生活も気にならない

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	9.7	28.0	49.2	13.1
現 コ ミ	13.5	28.8	45.1	12.6
全 体	10.5	28.2	48.3	13.0
伝 総	14.1	27.8	38.8	19.3
中 堅	10.9	26.9	39.7	22.5
新興 I	16.5	39.7	35.4	21.4
新興 II	11.0	22.5	40.3	16.6

※4類型間に有意な差なし(5%水準)

表7では、有意な差はないが、P短大の学生は、やや働くことへの意欲が多少高い傾向がよみとれる。

表8では、どちらかというとな新興大学の傾向に近いことがわかる。単に自己評価が低いだけなのか、本当に得意な分野が客観的にみてもていないのか、確かめる必要がある。

表9では有意な差はないものの、比較的現在志向が多少強い傾向がみとれる。数値的には新興大学IIに近いようである。

表7 5. 働かずに生活できるなら働きたくない

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	19.0	26.1	41.2	13.7
現 コ ミ	14.5	30.0	40.0	15.5
全 体	18.1	26.9	41.0	14.0
伝 総	22.4	25.0	35.8	16.8
中 堅	19.9	26.0	37.5	16.6
新 興 I	19.3	23.3	35.1	22.4
新 興 II	16.9	24.9	31.9	26.2

※4類型間に有意な差なし（5%水準）

表8 6. 人に負けない得意分野をもっている

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	11.4	30.7	45.0	12.9
現 コ ミ	11.7	21.6	53.2	13.5
全 体	11.5	28.7	46.8	13.0
伝 総**	15.6	33.6	39.6	11.2
中 堅*	13.5	31.6	43.1	11.7
新 興 I	16.1	25.8	41.0	17.1
新 興 II	17.1	24.1	44.2	14.6

表9 7. 将来のことより現在を大切にしたい

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	14.6	38.2	45.5	1.7
現 コ ミ	11.0	33.0	47.7	8.3
全 体	13.9	37.1	45.9	3.1
伝 総	9.6	35.4	48.2	6.8
中 堅	8.2	36.1	49.7	6.0
新 興 I	10.0	33.0	50.5	6.5
新 興 II	12.1	36.2	45.6	6.1

※4類型間に有意な差なし（5%水準）

表10では、傾向的には新興大学Iの類型が一番近いが、総じて将来を不安に思う学生が21大学の学生より多い。何が不安の源泉になっているのか、就職上不利な立場にあると考えているのか、社会状況に対して漠然とした不安をより敏感に感じ取ることができているのか、別の形での検証が必要

と思われる。

表10 8. 自分の将来に関して不安を感じる

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	48.2	43.3	7.0	1.5
現 コ ミ	45.1	44.1	9.0	1.8
全 体	47.5	43.5	7.5	1.5
伝 総**	31.9	47.4	16.9	3.7
中 堅**	38.8	44.9	12.2	4.0
新 興 I*	45.0	43.2	8.4	3.4
新 興 II**	39.3	43.6	12.7	4.4

※保育は全4類型との有意差あり（新興Iのみ5%水準、あとは1%水準）。

※現コミは伝統総合とのみ有意差あり（5%水準）。

表11 9. 努力より自由という言葉が好きだ

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	19.8	40.8	35.7	3.7
現 コ ミ	21.6	33.3	37.0	8.1
全 体	20.2	39.2	36.0	4.6
伝 総**	12.0	26.2	49.5	12.3
中 堅**	12.7	27.8	47.0	12.5
新 興 I**	15.8	24.2	48.1	11.8
新 興 II**	17.8	30.7	43.4	8.1

表11では、一見するとP短大の学生は、「コツコツ生きる」よりも「楽天的に生きる」ことを重視する傾向があるように見えるが、先の表9で現在を重視する傾向がやや強い（とくに保育学科）と考えられたことを含みおくと、「自由」ということばを無批判に受け入れる学生が比較的多いということも、可能性として考えられる。

表12では、どの類型よりも「自己肯定」がかなり弱い傾向がでてくる。このデータだけで安易に結論づけられないが、4年制大学ではなく短期大学に進学したことからくる「タテの学歴」の差に対する劣等感が、こうした傾向の背後に控えている可能性もある。

表12 10. 自分が好きである

単位：%	とても	やや	あまり	全然
保 育	4.4	30.7	50.0	14.9
現 コ ミ	5.4	27.9	51.4	15.3
全 体	4.6	30.1	50.3	15.0
伝 総**	15.4	46.5	30.9	7.2
中 堅**	13.6	38.3	37.2	10.9
新興 I **	10.2	38.2	35.1	16.5
新興 II **	13.4	34.0	40.6	11.9

5) 大学教育や授業・学習に対する意識に関する  
学科間の相違と21大学調査における4類型との比較

Q21に配置した5点の小問について、両学科の間で有意な差があるかどうかを確かめた。また、小問2、4、5については、P短大全体と21大学調査の4類型(以下4類型)とも比較( $\chi^2$ 検定)し、有意な差があったものについては、以下の表13~17の\*\*印(1%水準)または\*印(5%水準)にて示している。なお、小問1は、選択肢を増やしたため、小問3は独自の設問のため、21大学調査との比較が不可能である。

表13にかかる本設問は、21大学調査では、両立志向に当たる3つめの選択肢がなく、ほぼ半々に分かれて、学業より生活重視のタイプが若干多かったようである。本調査では両立志向を選択肢として含めたが結果を見る限り、両方をそれなりに重く見ている学生がほとんどということがわかる。また、学科間での有意差があった(1%水準)。現コミ学科の方が、明らかに「勉強したい」という強い意識を持った学生が相対的に多くいることが分かる。

表13 1. 大学は……

単位：%	学び重視	体験重視	両立志向
保 育	2.5	11.4	86.1
現 コ ミ	6.7	23.8	69.5
全 体	3.4	14.0	82.6

表14 2. 単位は楽に/大変でも興味ある科目

単位：%	楽 勝 派	興味関心派
保 育	51.6	48.4
現 コ ミ	44.7	55.3
全 体	50.2	49.8
伝 総	30.8	69.2
中 堅	26.9	73.1
新興 I	29.1	70.9
新興 II	36.8	63.2

\*保育は全4類型と有意差あり(1%水準)。

\*現コミは、新興II以外の3類型と有意差あり(1%水準)。

表14では、両学科間の有意差がある(1%水準)ことから、保育学科よりも現コミ学科の学生の方が、より興味関心を重視する傾向にあるといえる。また、P短大全体でもみて21大学に比べて「楽勝派」の学生が明らかに多いが、これは、両学科とも取得すべき単位数が短期大学設置基準上の最低取得単位数より多くなっており(P短大『学生必携』より)、学生が比較的多忙になっていることが背景として考えられる。このことは、本稿では詳しく触れられないが、Q10の自由回答で、大学入学前まで抱いていた大学に対するイメージと大学に入ってからの実際とのギャップを回答させる設問で、忙しさをあげる学生が目立ったことからわかる。

表15にかかる本設問は、授業中の私語に遭遇したとき、誰に嫌悪のベクトルを向ける傾向があるかを知るため、21大学調査にはない独自に設定したものである。学科間での有意な差はない。

学生や家庭に問題がある、つまり私語をする本人およびその背後にある家庭環境に嫌悪のベクトルが向く学生が5割弱と最も多い。続いて教員が3分の1強あった。

表15 3. 私語の責任は……

単位：%	学生家庭	教 員	周囲学生
保 育	46.5	38.2	15.3
現 コ ミ	46.0	31.0	23.0
全 体	46.4	36.7	16.9

そして、本設問でもっとも着目したかったのは、「周囲の学生に責任がある」とする学生がどのくらいいたかであり、保育で約6分の1、現コミで4分の1弱であった。この設問は、大学という共同生活を行う場所に対して共同体としての意識を強く持つ学生がどの程度いるかを知るための指標として設定したものである。本調査の結果だけで何らかの結論づけを行うのは不可能であるが、こうした4～6人に1人いる共同体意識の強いと目される学生を、いかにして掘り起こし生かしていくかが、今後の大学教育の課題の一つになり得ると筆者は考えている。

表16 4. 「お役立ち」重視／「知的刺激」重視

単位：%	お役立ち派	知的刺激派
保 育	68.9	31.1
現 コ ミ	48.0	52.0
全 体	64.6	35.4
伝 総	38.7	61.3
中 堅	50.2	49.8
新 興 I	57.9	42.1
新 興 II	61.3	38.7

※保育は全4類型と有意差あり（1%水準）。  
 ※現コミは、伝統総合および中堅とは有意差なし。  
 新興Iとは5%水準、新興IIとは1%水準で有意差あり。  
 ※両学科で有意差あり（1%水準）。

表16では、保育で「社会に出て役に立つ内容」が強く重視されるのは、専門職養成を主目的とする学科である以上、予想できる結果ともいえるが、もし教養が軽視される傾向にあるとすれば、大学として看過できない問題でもあると思われる。現コミは、とくに中堅大学に、傾向が近似していると考えられる。

表17 5. 教員が指導を／学生の自主性を

単位：%	教員指導派	学生自主性派
保 育	28.0	72.0
現 コ ミ	14.7	85.3
全 体	25.3	74.7
伝 総	10.0	90.0
中 堅	14.4	85.6
新 興 I	14.1	85.9
新 興 II	16.5	83.5

※保育は全4類型と有意差あり（1%水準）。  
 ※現コミは全4類型と有意差なし。  
 ※両学科で有意差あり（1%水準）。  
 ※4類型間には有意差あり（1%水準）。

表17では、自主性を重視することよりも教員に指導されることを望む学生が少ないことは、現コミと21大学との共通の傾向として考えられるが、保育学科の学生に関しては教員の指導を望む声が相対的に多い。学科の特性上、実習や就職、技術習得などに対して綿密に指導して欲しいという思いの表れとも考えられるが、一方で自立不足や他者依存の傾向としてとらえることも可能だろう。

#### 6) 学生の授業の受け止め方に関して

つづいて、Q8に設定した「あなたは、今の大学の授業について、どのように感じていますか」という設問に対して、5つの問いを立てている。それぞれ1～5の5段階で回答させている。1から5の順に「とても感じる」「やや感じる」「どちらでもない(表中のNT)」「あまり感じない」「全然感じない」である。なお、回答の「とてもそう」「ややそう」の2つを合計し検定を行っている。

先の設問の分析と同様に、P短大全体と21大学調査の4類型（以下4類型）とで、有意な差( $\chi^2$ 検定)があったものについては、以下の表18～22の\*\*印（1%水準）または\*印（5%水準）にて示している。なお、21大学調査において4類型間に有意な差がみられなかった（5%水準）、Q8-3



の設問については、参考までに4種類の数値だけを示し、検定は行っていない。

表18 1. 面白い授業がある。

単位：%	とても	やや	NT	あまり	全然
保 育	31.3	54.8	10.0	2.9	1.0
現 コ	17.1	52.3	18.0	7.2	5.4
全 体	28.3	54.3	11.7	3.8	1.9
伝 総**	21.7	53.3	12.9	9.9	2.3
中 堅**	15.3	51.9	17.5	12.9	2.5
新 I**	13.4	41.4	26.2	11.8	7.2
新 II**	13.6	49.3	23.4	10.2	3.6

※保育と現コミおよび4類型との間に有意な差がみられた(1%水準)。

※現コミと新興大学Iとの間に有意な差がみられた(1%水準)。

表18では、保育学科は、教育内容の特性上「座学」ばかりではなく実践的な授業も少なからずおかれ、そこでは子どもを相手にする専門的技術が扱われるために、「面白い」授業を受けることができる傾向がどこよりも強いのは、当然の結果といえる。

一方現コミに関しては、伝統総合および中堅の両類型に比較的近い。

表19では、「幅広い知識が得られる」と多少なりとも感じている層が比較的保育学科に多い。2種類の資格・免許取得をめざす学科の特性上、カリキュラムも21大学や現コミに比べ、より専門に偏らざるを得ない状況があるものと思われる。もし総じて保育者養成系の短期大学がそうであるならば、教養科目が手薄になりがちで、むしろ《大学》として幅広い知識をいかにして提供するかということが課題となるはずなのだが、このような結果になったのはなぜだろうか。

もし、「保育に関する知識・技術」=「幅広い知識」という理解をしている学生が相当数いることが、この数字の裏にあるとするならば、知識というものの幅を大変に狭くみていることになる。専

門的知識・技術の習得に特化している専門学校とは違い、教養も身につけさせることも重要な役割として含まれる大学の場において、教養観念の大きな欠如とも解釈できる余地があるこの結果は、今後さらに検討を深める大きな課題として残る。

表19 2. 幅広い知識が得られる。

単位：%	とても	やや	NT	あまり	全然
保 育	26.0	55.2	13.4	5.4	0.0
現 コ	12.6	54.1	20.7	8.1	4.5
全 体	23.2	55.0	14.9	5.9	1.0
伝 総**	17.4	51.9	20.9	8.2	1.7
中 堅**	11.4	47.0	27.9	11.2	2.5
新 I**	14.9	49.1	23.3	9.0	3.7
新 II**	14.0	46.4	27.1	9.1	3.4

※保育と現コミおよび全4類型との間に有意な差がみられた(1%水準)。

※現コミと全4類型との間に有意な差はなかった。(5%水準)

表20については、保育学科の学生にとって、「当たり前すぎる」設問だったと思われる。現コミについては、新興大学IIがもっとも数値的には近い。

表21では、熱心さについては、大まかにみれば21大学以上の評価を得ているのだが、「とても熱心」とまで高く評価している学生の割合が、とくに現コミにおいてとりわけ低い。熱心さは認められるが、留保したい部分が少なからずあることが可能性として考えられる。この「とても」と「やや」の狭間にある学生の意識を、さらに掘り起こして探りたいところである。

表20 3. 専門的知識が得られる。

単位：%	とても	やや	NT	あまり	全然
保 育	56.5	38.2	5.1	0.2	0.0
現 コ	27.0	45.1	16.2	6.3	5.4
全 体	50.2	39.7	7.5	1.5	1.2
伝 総	20.8	45.5	21.4	10.4	2.0
中 堅	16.6	47.4	21.7	11.4	2.8
新 I	20.6	48.0	19.6	8.4	3.4
新 II	24.7	46.2	18.9	7.4	2.8

※保育と現コミとの間に有意な差がみられた(1%水準)。

表21 4. 先生が授業に熱心である。

単位：%	とても	やや	NT	あまり	全然
保 育	22.6	55.9	19.5	2.0	0.0
現 コ	9.9	50.5	31.5	6.3	1.8
全 体	19.9	54.8	22.0	2.9	0.4
伝 総**	30.2	32.3	14.5	12.0	11.1
中 堅**	29.6	36.6	15.5	10.4	7.9
新 I**	28.9	37.9	18.3	9.0	5.9
新 II**	20.6	30.6	20.4	13.0	15.5

※保育と現コミおよび全4類型との間に有意な差がみられた(1%水準)。

※現コミと全4類型との間に有意な差はみられなかった(5%水準)。

表22では、保育学科の「満足度」の高さが、全体を押し上げている形になっている。先に述べたように、「面白い」授業が比較的多く受けられることなど、学科の特性が反映された結果ともいえる。それだけに、授業の洗練度や教育効果の高さを裏付けることまではできないだろう。むしろ「満足度」とは別に、学生に「良質な授業」が提供できているかどうか、そしてそれがどんな教育効果に結実しているかを判断する尺度が必要になると思われる。

表22 5. 授業全般に満足している。

単位：%	とても	やや	NT	あまり	全然
保 育	7.8	50.4	29.4	11.0	1.5
現 コ	3.6	26.1	42.4	19.8	8.1
全 体	6.9	45.2	32.2	12.8	2.9
伝 総**	3.8	30.1	33.0	26.2	6.8
中 堅**	1.8	22.4	41.6	25.6	8.6
新 I**	1.6	22.4	40.7	23.3	12.1
新 II**	3.4	20.0	42.0	22.5	12.1

※保育と現コミおよび全4類型との間に有意な差がみられた(1%水準)。

※現コミと全4類型との間に有意な差はみられなかった(5%水準)。

## 7) 入学直後くらいまでに教えて欲しいこと

Q9では、大学入学前や入学時、入学後すぐの段階(1年前期)までに教えて欲しいと思うものをすべてあげる問いを設定した。本調査独自の設問である。具体的な選択肢として「大学と高校までの違い(学習・学生生活・先生など)」「図書館の利用の仕方」「レポートの書き方」「2年間の学習生活や学生生活のスケジュール」の4つを用意し、なおかつその他にあれば、具体的に記述させている。

表23

単位：%	保育	現コミ	全体
高校と大学の違い	32.8	26.1	31.4
図書館利用法	5.3	6.3	5.5
レポートの書き方	68.5	50.5	64.6
2年間のスケジュール	69.7	73.0	70.4

※「レポートの書き方」のみ、両学科で有意差あり(1%水準)

表23は、4つの選択肢それぞれに、教えて欲しいとした学生が全体に対してどのくらいいたかをまとめたものである。

本調査結果だけではそれぞれの数値について、多いととらえるべきか少ないととらえるべきかを結論づけることは避けるべきではあるが、いずれも多面的な解釈の可能性を秘めていると思われる。

「高校と大学の違い」については、学科全体、あるいはP短大全体としてどうとらえるかという視点よりも、これを回答した3割前後の学生たちがどのような属性をもっているかを検討する必要があるだろう。たとえば、学生の出身高等学校の属性によっても傾向が異なると思われる。進学志向が比較的強く、大学に関する情報に意図的または無意図的にアクセスできる環境をもった高等学校と、そうでない環境の高等学校とでは、自ずと「大学に関する予備知識」にも差が出るものと思われる。

「図書館の利用の仕方」については、単純に学

生たちが図書館の利用の仕方を知る必要に迫られていないことが、この数値の背景にあると思われる。その割には、とくに保育学科において、レポートや試験の負担が大きいという学生の自由記述が一定割合みられる(Q10)。とくにレポートに対応するためには、図書館で調べるといった作業が必要になることが多く、もっと利用の仕方を知る必要に迫られると思われるのだが、おそらく通常の学習活動と図書館の存在とが、何らかの形でうまくリンクしていないために、このような結果につながっているのではないか。高校までの図書館教育の不足、大学での「図書館を使わせる」学習方法の欠如など、いくつか原因は考えられるが、さらなる精査が必要な事項である。

「レポートの書き方」については、現コミ学科より保育学科の方が、希望する学生が有意に多い。相対的に現コミ学科が少なめなのは、そうした学習を高校までに積んできている学生が比較的多いことが、可能性の一つとして考えられる。「高校と大学の違い」同様に、出身高校の属性によって傾向の違いが見いだせる可能性があると思われる。

「2年間のスケジュール」については、約7割の学生が教えて欲しいと回答した。これだけの学生が見通しを立てられないまま、学習・学生生活を過ごしていることになるため、通常の学習へのモチベーションも低下することが懸念される。もし、P短大がこの件に関して学生への周知に一定の取り組みをしているとしたら、その方法に問題点があると思われ、また取り組み不足なのであれば、質量両面からの取り組みの改善に注力することが必要になると思われる。

積み残している設問の分析も含めて、近いうちに他の機会を設けて、もう少しこの問題を深く掘り下げたい。

#### 4. まとめ・結論

P短大の学生を対象とした分析を、学生像および大学での学習に対する意識について行い、その

分析作業の中で得られた、自校の学生を対象とした調査研究を行う際に考慮すべきであろうと思われる点をあげる。

第1に、「○大生」「○短生」などの表現に象徴されるように、特定大学(学部・学科)の学生に備わっている一定の気質が、ケースによっては存在しうることを念頭に置く必要があると思われる。本稿で分析した設問だけに限っても、P短大の、とりわけ保育学科において、21大学調査の4類型とかなり異なる傾向がみられた。21大学調査では、創立年を主な軸にして、偏差値や規模なども加味した類型を使用した説明を試みているが、そのほかの軸をも含めて考えないと説明がつかない大学生も存在することが示唆されていると思われる(本稿の場合は、4年制大学か短期大学か、といった要素などもあるだろう)。今後、さまざまなケースでの研究を重ねていくことにより、さらに学生の類型を多様に展開できる可能性があると思われる。

第2に、分析で得られた数値的な結果に安易に惑わされてはならないということがあげられる。これは、Q8-4の設問の分析結果に象徴される。「とても」「やや」をあわせた数値をみると、21大学よりも教師の「熱心さ」が高いようにみえるのだが、「とても」が相対的に少ないことから、「熱心さの中にも一定の不満あり」と読める結果である。いたずらに数値が高いからといってと安心して思考停止すると、こうしたサインを見落とす可能性がある。

第3に、「教養を学ぶ」ことに対する意識を掘り起こす方法について、さらに工夫を積み重ねる必要があると思われる。「幅広い知識」が学んでいるかという問い(Q8-2)に対して、専門重視の姿勢が強い傾向をもつ学科の中で「幅広い知識が得られている」という認識を持つ学生が多くみられる回答傾向がでてきているが、これが大学教育の根幹のひとつである教養教育が十分な効果を上げていることへの実証にはどうも結びつけにくい。「教養」ということばを直接問いに使うことにも限界があ

り、これは教養教育の効果の検証を学生調査で行う際の大きな課題となると思われる。

さらに、Q 8-5にある「満足度」という尺度には、学生への教育や支援の「質」をはかるためにしばしば用いられるが、このことばには、以下のような指摘に共通する問題点があると思われる。Vroeijenstijn (1995) は、Pirsig (1974) の考察を踏まえて「質とは愛のようなものである。誰もが愛について語り、そこで語られているものが何であるか、誰もが理解している。そこに愛があれば、誰もがそれに気づきそれを感じる。誰もがそれを認識している。しかし、そこで愛を定義しようとすると、我々の手元には何ひとつ残ることがない」(p.13: 筆者訳) と述べている。「満足度」についても、いかなる事象に対して「満足」を感じるのか、それにも学生によって違いがあるため、「質」同様にそれを定義することは事実上不可能であると思われる。

今回、21大学調査との比較のために表現はそのままにして調査したが、こうした「読み違い」はやはり避けられないように思われる。この課題を克服し、学生の実態や認識をすくい上げる精度をさらに上げるためには、「満足度」という定義づけが困難な指標に多くを頼らず、より多角的に学業や学生生活の諸側面に切り込む設問を用意し、分析材料とする必要がある。また、質的な分析を行えるよう、自由記述による回答を活用することも必要となろう。

## 5. 今後の課題

現段階の調査分析では、P短大の学生、あるいはP短大の保育学科および現コミ学科の学生をひとまとめにしてとらえているに過ぎない。ひとつの大学なり学科に所属する学生が、一様であるというのは現実的ではない。そのため、短大(学科)内で学生にどのような属性をもったグループが存在するのかを、今回分析をしていない設問などを活用して分析することを試み、学生支援などにき

め細かに対応できる知見を得る必要があると思われる。あわせて、出身高等学校の属性による傾向の分析も行う必要がある。

また、21大学のいずれの類型とも異なる傾向が強かった保育学科の学生に関して、これがP短大に限られた特殊なケースなのか、保育系学科一般にみられる傾向なのかを、他大学の保育系学科に在籍する学生に対する調査を行うことにより、専門性を強くもつ大学における学生状況の把握のノウハウと、あるべき教育の姿を探る足がかりを見つけていることが、今後の大きな課題として残されている。

### 〈注〉

- (1) 大学が社会的信用を得るために、大学人みずからが組織した「大学基準協会」による評価を数年ごとに受けるシステム。大学基準協会は、地域別、専門分野別、そして大学属性別に多様に展開されている。詳しくは、喜多村 (1993) などを参照。

### 〈参考文献 (ABC 順)〉

- 青山佳代 “アメリカ州立大学におけるインスティテューショナル・リサーチの機能に関する考察”：名古屋高等教育研究第6号、2006、pp.113-30。
- 喜多村和之 『新版・大学評価とは何か』、1993、玉川大学出版部
- 溝上慎一 『大学生論』、2002、ナカニシヤ出版
- 溝上慎一 『大学生の自己と生き方』、2001、ナカニシヤ出版
- Pirsig, R.M., *Zen and the Art of Motorcycle Maintenance*, 1974, Morrow. (訳書：パーシグ、ロバート・M (五十嵐美克、兒玉光弘訳) 『禅とオートバイ修理技術：価値の探求』、1990、めるくまーる)
- P短期大学 『学生必携』平成18年度版
- Riesman, David, *On Higher Education: the Academic Enterprise in an Era of Rising Student Consumerism*, 1980, Jossey-Bass. (訳書：リースマン、デヴィッド (喜多村和之・江原武一・福島咲江・塩崎千枝子・玉岡賀津雄訳) 『高等教育論——学生消費者主義時代の大学』、1986、玉川大学出版部)
- 武内 清 (研究代表者) 「学生のキャンパスライフの実証

的研究～21大学・学生調査の分析～」、2005（「有効な学生支援に関する実証的研究～学生のキャンパスライフからの考察～」（平成16～18年度文部科学省科学研究費補助金：基盤研究（B）：課題番号16330167）研究成果・中間報告書）

武内 清 『キャンパスライフの今』、2003、玉川大学出版

部

Vroeijsenstijn, A.I., *Improvement and Accountability: Navigating between Scylla and Charybdis*, 1995, Jessica Kingsley Pub. (訳書：フローインスティン、A.I. (米澤彰純・福留東土訳) 『大学評価ハンドブック』、2002、玉川大学出版部)

〔2006年10月27日 受付〕  
〔2006年11月29日 受理〕